

当番世話人挨拶

この度、第1回日本肝がん分子標的治療研究会を開催させて頂くことになりました。実はすでに「がん分子標的治療学会」というものが存在しており、「新しく肝がんのみに絞った研究会を作るのはどうか」という若干の躊躇もありました。しかし、私自身「がん分子標的治療学会」に参加致しました印象は、「この学会は極めて基礎的なことや多様な臓器にわたる分子標的治療を対象としているため、基礎研究者や Medical Oncologist にとっては極めて有用な学会であるが、これまで肝癌の治療を行ってきた肝癌専門医にとっては参加するには内容的にやや求めているものとのギャップがありすぎる」と感じたのが肝がんのみに絞った研究会を発足させたいと思ったキッカケでした。幸いに内科的局所治療を行っている数名のメンバーも同様の考えを持っておられましたし、肝癌治療に関係する多くの内科医、外科医、放射線科医、腫瘍内科医の先生方のご賛同も得られました。さらに指導的立場にいらっしゃる4名の先生方からも顧問として協力して頂けるというお言葉を頂きましたので、この第1回研究会を開催させて頂く運びとなりました。

現在全身抗がん治療薬として承認されている分子標的治療薬は Sorafenib のみではありますが、今後、次々と世に出てくるであろう作用機序の異なる薬剤のことを考えると、このように肝がんの分子標的治療全般について勉強する機会を作ることは大変重要と思われれます。Sorafenib については 2009 年 5 月の日本での承認以降、約 2,000 例以上の症例に使用されているとのことをごさいます。しかしながら、まだまだ治療の仕方・対象症例の設定・投与量あるいは重篤な副作用の対策・予防法などすべての施設において手探りで治療しているのが現状であり、このことは誰もが感じられていることと思います。

今回、このような研究会で、他施設での経験症例の報告を数多く聴いて頂き活発な discussion を行うことは自分自身の経験だけでなく、他の人の経験をも自分のもの

とすることのできる絶好の機会であり分子標的治療に対する理解が飛躍的に高まるものと思われます。

このような新しい治療の経験は日本のすべての肝癌治療医にとって極めて新しいことでもあります。この度、当初の予想をはるかに超える 54 題もの一般演題を頂きました。元より研究会ですので、すべてを採択するつもりでおりましたし、一例一例の報告が新鮮で何かを示唆する内容を含んでいるものと思われます。したがって大変タイトな発表時間でのスケジュールとなってしまいましたが、このような事情を勘案して頂き、何卒ご容赦頂きたいと思ひます。発表時間は一例報告は 3 分、二例以上の報告は 4 分、もう少しまとまった発表については発表の時間は 5 分でコンパクトに presentation して頂き、ディスカッションの時間は 3 分設けました。また、その間に 4 つの基調講演をして頂くことになります。

基調講演 1 では基礎的な知識も我々にとって大変重要ですので西尾和人教授に「がんの増殖機構と分子標的治療」というタイトルでご講演頂きます。基調講演 2 では分子標的治療にとっては、副作用マネジメントが極めて重要ですので池田公史先生に「分子標的薬の副作用マネジメント：院内連携体制構築の重要性」ということでお話頂きます。基調講演 3 では現在「開発中の分子標的治療の世界の動向」というタイトルで古瀬純司先生より新しい分子標的治療薬のお話をして頂きます。また、基調講演 4 では肝以外の消化器領域の分子標的治療の最新の動向について吉野孝之先生にお話して頂きます。我々肝癌治療医も他の分野の分子標的治療の動向を知っておくことは極めて重要であると考え、吉野先生にお願いすることにしました。またランチョンセミナーでは京都大学の吉村健一先生に「エビデンスを作る臨床試験の ABC」ということで肝癌治療医にこれまで欠けているとされてきた臨床試験についてのご講演をして頂く予定に致しております。

盛り沢山な内容ですので長丁場の会となりますが、是非 1 月 16 日は丸丸 1 日充

分に勉強して頂き、分子標的治療が何たるかを適正使用の重要性も含めてどっぷりとつかって頂ければ大変幸いに存じます。

また、会終了後には懇親の場も設けておりますので1月16日は朝から晩まで充実した一日になるよう十分に体調を整えて神戸までお越し頂ければと存じます。

2009年12月12日

日本肝がん分子標的治療研究会事務局・代表世話人
第1回日本肝がん分子標的治療研究会当番世話人
工藤正俊（近畿大学医学部消化器内科学教授）